『ときメロ』番外編?　～和希バースデーを迎えるの巻

みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『ときメロ』番外編？　～和希バースデーを迎えるの巻

【Ｎコード】
Ｎ８３３２Ｖ

【作者名】
みなと

【あらすじ】
体は女、心は男の主人公が、乙女ゲーの世界で奮闘するラブコメディ『ときメロ』の番外編。
主人公が溺愛されてるだけのおバカな逆ハーもの（一応）です。

（前書き）

＞i28232―3393＜illustration：ひなむぅさん

＊登場人物紹介＊

和希…主人公。乙女ゲーム『ときメロ』のヒロインに転生してしまった男の子。

煌……奔放な同居人。特技、料理。

悠斗…クールな幼馴染。照れ屋さん。

王子…学園の王子様。天然。

静流…年下プレイボーイ。要領がいい。

魔王…妖艶な魔王様。強引ぐマイウェイ。

芽生…ヒロインの妹。中身はどS姉。

ピロリロリン♪

リビングに鳴り響くメールの着信音。

「待て、和希」

テーブルに置いていたケータイに伸ばした手首を、隣のソファから身を乗り出した煌にグッとつかまれた。

何事かと視線をやれば、満面の笑みとともに一言。

「誕生日、おめでとう」

「……あ、そっか。さんきゅ」

時計を見れば、零時ピッタリ。

8月20日。今日は、おれの誕生日。

ケータイを確認したら、王子と静流、かんなからのバースデーメールが届いていた。

「俺が『おめでとう』一番乗りな」

なぜか誇らしげな煌に、あ、そーゆーこと、と納得したものの、たったそれだけでそんな嬉しそうにされても反応に困る。

「で、プレゼントは？」

戸惑いを隠すためにいたずらっぽく言ってやったら、「それはまだ夜のお楽しみ」と返された。

「あるんだ！？」
「当然。じゃ俺、朝バイト早いから、おやすみ」

何言ってんだ、という顔で苦笑してからさっさと二階へあがっていく煌。わざわざこのためだけに起きてたらしい。
――そういや、順調に好感度が上がってたら誕生日プレゼントがもらえる、とか、かなり前に姉貴が言ってたっけ。
ホッとすると同時に、あんまり好かれてもなぁとも思う。クリアのためには仕方ないんだし、いい加減諦めろとまたどつかれそうだが、複雑な気持ちはどうしようもない。
……ん～、まいっか。お祝いしてもらえるのは嬉しいしな！　好意は素直に受け取ることにしよう。わくわく。

◆◇◆

「起きて、和希！　誕生日おめでとう……でもって下、すごいことになってるわよ！」

翌朝、姉貴にたたき起こされて、階下に降りたおれは、あんぐりと口を開けた。
ハンバーグ。カレー。グラタン。オムライス。ピラフ。エビフライ。ミートスパゲッティ。ビーフシチュー。コーンポタージュ。タコさんウインナー。プリン。
これでもかと食卓に並べ立てられた、おれの好物たち。
あいつ……張り切りすぎだろ。カレーとシチューとか、マジ意味不明だし。そもそも朝からこんなに食えるか！
すでにバイトに出たらしい煌の残した『チンして食べてください』という書き置き（お母さんかよ！）をぐしゃりと握り締めていたら、姉貴がニヤニヤしながらひじでつついてきた。

「愛されてるわね～。あんた、いったいどんだけ好感度あげてるわけ？」
「知るか！」
更には、リラッ〇マの巾着に包まれた弁当箱まで置かれている。ここまでやられると、正直引くぞ……とげんなりしたが、まだまだこんなのは序の口にすぎなかったのである……。

ピンポーン

チャイムの音に扉を開くと、制服姿の悠斗がいた。夏休み中だが、今日も朝から軽音部に集まって練習なのだ。
「おはよ。煌は今日はバイトで休むってさ」
「そうか……」
軽くうなずいてから、悠斗が大小二つの紙袋を差し出した。
「おめでとう」
「ありがとう……？」
首をかしげながらまず小さい方の袋を開くと、中から出てきたのはおれが好きなインディーズバンドの超レアCD。もはや廃盤になって入手困難な一品だった。
「すげえええー！　どうやって手に入れたんだ？　大変だっただろ！？」

一気にテンションのあがったおれに、悠斗はそっけなく「別に」と視線をずらした。

「たまたま入った古本屋で目に付いただけだ」

いや、その辺においそれと転がってるような代物じゃないぞ、絶対。しかし、ここはありがた～くいただいておこう。

「大きい方はなんだろ？」

のぞきこんだ中身は……ダイエットプー〇ル茶が６ケース。ズーン。（↑テンションがダダ下がりする音）

「ダイエットしたいとか言っていただろう？　効果の程はわからないが、清涼飲料を摂取するよりは糖分が少ない茶の方がいいと思った」

淡々と説明する悠斗。

うん、なんの悪気もないことはわかるし、おれが言うのもなんだけど……悠斗、おまえはもう少し女心を勉強すべきだと思うぞ。

バスを降りてからの通学路。タッタッタッ…と軽快な足音が後ろから近付いてきたかと思うといきなりギュッと抱きつかれた。

「センパイ、はぴば！」

「うわっ静流！？　ビックリさせんなよ」

不意打ちにドキドキなる胸を押さえながら非難するおれに、静流は「１６歳になったセンパイも可愛いな～」とほおをほころばせた。

聞いちゃいねえ。
芝居がかった仕草で腰を折り、うやうやしく一つの封筒を差し出す。
「貴女のあふれてやまない魅力に囚われたあわれな男の貢物。どーぞ、お納めください」
封を開けて出てきたのは、これまたおれが最近ハマっている海外アーティストの、発売2分で完売されたという来日ライブのプレミアムチケット。
「本物かこれ！？　すごすぎ。よく取れたなー！　さんきゅ！」
「あちこちのツテを最大限活用してね。苦労したけど、オレもこの人達の生パフォーマンス、興味あったし。一緒にいこ♪」
ちゃっかりデートの約束も取り付けるところが相変わらず抜け目ない。
「あとは、センパイの魅力を歌にして弾き語りして贈ろうと思ったんだけど、これが虎●竜ばりに長くなっちゃって……最後の章だけ弾かせてもらうよ。『センパイ―第13章―』」
「いらん」
てか懐かしすぎるだろ、●舞竜。
学校に到着した途端、目をむいた。
いつのまにやら校門脇に、二ノ宮金次郎よろしく設置された、一つのブロンズ像。
そのマイクを握った制服姿の少女の顔かたちは、どうみてもおれ

……絶対やらない可愛らしいキラッ☆ポーズの上、その背中にはなぜか一対の翼が生えていたが。タイトルは『ＳＷＥＥＴ　１６　ＭＥＭＯＲＩＥＳ』。
更には、でかでかと校舎の窓の端から端に渡されたカラフルな横断幕。
『ＭＹ　ＦＡＩＲＹ　和希ちゃん　ＨＡＰＰＹ☆ＢＩＲＴＨＤＡＹ』

「王子〜〜！」

ダッシュで廊下を駆け抜け、部室のドアを開けた途端、「讃えよ和希を　ああ〜」という大合唱に迎えられ、ポカーンとなった。
内部はこれでもかと色とりどりの花が生けられ、七夕飾りのようなチェーンやらモールやら羽根やらが賑やかに飾られている。そして、謎のオーケストラと合唱団の存在。

「和希ちゃん、お誕生日おめでとう！　君への思いを、全１６楽章の交響曲にしたから聴いてもらえるかい？」
「……負けた」
「負けでいいから！」
愕然としたように呟く静流に全力で突っ込んでから、王子につかみかかった。

「あの像と横断幕すぐ取り去れ！　どーゆー嫌がらせだよ！」
真っ赤になってのおれの剣幕に、王子はみるみるシュン、と肩を縮こめる。
「ごめんよ……この素晴らしい奇跡の聖誕祭に、つい舞い上がってしまったみたいだ」

「いや、気持ちは嬉しいんだけどな……その、ありがとう」

あからさまに落ち込まれて、焦ってそう続けたら、王子はクスッと相好（そうごう）を崩した。

「やっぱり君は優しいね。これなら、受け取ってくれるかな。生まれてきてくれて、ありがとう」

そんな言葉とともに渡されたのは、リボンがかかった大きな包装紙。中から出てきたのは、巨大リラッ〇マぬいぐるみ。……テラカワユス。

「とりあえず、８月２０日は国民の祝日にすべきだと思うんだ」

「だからおまえは真顔でボケるな」

◆◇◆

煌の持たせてくれたお弁当は、リラッ〇マのキャラ弁だった。……可愛すぎて食べられねーよこん畜生！

それでも泣く泣く完食して、午後練も終わっての下校時。

校門前で、突然、見慣れない外車がおれのすぐ脇に停車したかと思うと、扉が開き、無理矢理中に連れ込まれた。

あまりの急展開に呆気にとられる王子、悠斗、静流を残し、全速力で発進。

「今日でおまえも１６か」

混乱するおれの隣の座席に座っていたのは、魔王。っておまえか！　びびらせやがって。

「受け取れ」

無造作に差し出したベルベットの小箱を開くと――何百カラットあるんですか！？　つーくらいでっかいダイヤの指輪。

「受け取れるかっ！　なんだよ、この怪盗ルパンが狙いそうなお宝！　重いわ！　重すぎるわ！」

「はめてみれば見た目ほど重くはない」

「そーゆー意味じゃねえ！」

あーもう馬鹿ばっか！　と頭を抱えた時、ウウーッとけたたましいサイレン音。

「前のＢＭＷ、停まりなさい！　誘拐の容疑がかけられています。今すぐ停車しなさい！」

振り返れば、何十台というパトカーに追跡されていた。なんじゃこりゃ！

王子たちが通報したのか？　展開速すぎ。

「フン……警察が恐くて金儲けができるか」

なんとも不穏な事を呟いて、ちらりとフロントミラーで視線を投げた運転手に「撒(ま)け」と指示する魔王。

グン、と体が一瞬浮いた後、信じられないほどの猛スピードで周囲の景色が流れ去っていく。

ぎゃあああああ死ぬうううううう。

「停まりなさい！　停まらなければ発砲します！」

この声、王子！？　と認識するやいなや、立て続けに銃声。
早いよ！　３秒も待ってないよ堪(こら)え性なさ過ぎだよ王子！

「和希、レインボーブリッジだ」

悠然と促す魔王だが、残念ながらこちとら夕焼けの絶景を鑑賞する余裕など皆無だ。
ああもう、なんで誕生日にお台場で命がけのカーチェイス！？

ババババババ……と新たな轟音が耳に滑り込んできて、何事かと振り仰ぐと、なんとヘリコプターにまで取り囲まれていた。機体にでかでかと＜ＫＩＴＡＯＨＪＩ＞のロゴが見える。
クッと唇の端を吊り上げる魔王。

「おもしろい……地獄の果てまで逃げ切ってやる」
「逃げなくていいから！　頼むからもう停まってくれー！」

◆◇◆

結局、ケータイで王子に無事を伝え、警察の皆さんにも撤収してもらった。
パニクっててなかなか思い至らなかったけど、さっさとこうすりゃよかったな。ったく、無駄に寿命縮めたぜ……。

「おい、そろそろ家に帰りてーんだけど」
「このダイヤを受け取るなら願いを聞いていてやらんこともない」
「それは無理」
「ではおまえは何が欲しい？　何も贈らずにこのまま帰せるか！」

断固とした態度で主張されて、言葉に詰まった。

「欲しいもの……？　あ。……いや、でもこれは……」
「なんだ。なんでも良いから言ってみろ」

おれがひいきにしてるスポーツブランドの新作スニーカー。
登下校中に通りかかるくつ屋のショーウィンドウで一目惚れしたが、一介の高校生が簡単に手を出せるようなお値段ではなく、いいなあ欲しいなあと思いつつも諦めるしかないと思っていた。
パッと頭に浮かんだのはそれだけで、でもこんなこと言っていいのかと迷ったが、何か言わない限り解放してくれそうもない。
他にどうしても思いつかなかったので、散々ためらった末におずおずと伝えると、拍子抜けしたような顔をされた。

「スニーカー？　そんなものでよければ何百足でも買ってやろう」
「いや、一足で充分です！」

◆◇◆

「なんか……悪いな。でも、マジ嬉しい。ありがとう」

くつ屋経由で家まで送ってもらった別れ際。
何度目かの感謝を述べたが、魔王はまだ納得しかねるように眉を寄せている。

「本当にこれだけでいいのか？」
「ああ、これがいいんだ！　めっちゃ履き心地いいし、最高」

その場で履(は)き替えさせてもらったスニーカーは、軽くて、あつらえたようにぴったりで。これを履いてれば、どこまでだって歩いていけそうな気がした。

自然、ほおが緩みまくって仕方ない。

「……そうか」

うなずいた魔王は、いつになく瞳が和らいでいた。こいつのこんな表情、初めて見るかも。ちょっと新鮮。

「ただいまー」

玄関を開けた瞬間、ふわりと焼きたてのケーキの香りがして、幸せな気分になる。

「おかえり」

そう言って迎えてくれた煌の笑顔が、なぜか一瞬、強張って見えた。

「ん？　どうした？」

「なにが？」

そう言って首を傾げる煌は普段どおりで……気のせい、だったのかな。

でも、やっぱりなんかおかしい気がして、それとな〜く目で追ってたら、リビングで煌がおれの目を盗むようにして、椅子に置かれていた何かの箱をテーブルの下にさっと押し込んだのがわかった。

「なんだよ、それ」

「いや、これはなんでも……」

いつになく歯切れの悪い煌から、ちょっと強引にそれを奪う。
開けてみると――おれがずっと欲しかった新作スニーカー。今さっき魔王に買ってもらったやつと、まったく同じもの。

「……もったいぶらずに日付変わってすぐ、渡せればよかったんだけどな」

バツの悪そうに苦笑する煌だけど……今日、２０日は確か、バイトの給料日だ、ということに気付いて。なんか、急に胸がぎゅ～～っと苦しくなった。

最近、こいつがバイト多めに入れてたのって……。

「返品返品」と箱をしまおうとする煌をかわし、とっさに叫んでいた。

「やだ！」
「……は？　でも……」
「返さない。これも履く！　このスニーカー、ほんと気に入ったから、２足くらいあってちょうどいいもん。履き倒しより交互に使うほうが断然長持ちするしな！　……すっごく嬉しい。ありがとう」

心からの笑顔で感謝を告げると、ぽかんとしていた煌が、困ったように笑いながら「……うん」とうなずいた。
それから、なぜか「はあ～っ」と大きくため息をつく。

「……和希。やばい」
「なにが？」

唐突な言葉に首を傾げるおれに、煌はまたちょっと笑ってから、ふっと真顔になった。

……？

状況が飲み込めずきょとんとしているおれの頬に、そっと手が添えられて――

ピンポーン

「あ、あいつら、きたかな」

玄関の方に駆け出したおれの背後から、「あいつら??」と、脱力したような煌の声。

「朝食の残りがいっぱいあるし、おまえのことだからどーせ夜もまたいっぱい作ったんだろ？　つーわけで余ってももったいないから、バンドのみんなを呼んだんだ」

振り向かずにそう答えながら、今更ながらドッキンバックンと大きく鳴り出すおれの鼓動。

今、すっげー危なくなかったか！？　あのままぼーっとしてたら、絶対キスされてた……！

だらだらと流れ出した冷や汗をぬぐいつつドアを開けると、花やらお菓子やらをどっさり持ったいつものメンバーの姿。ああ、呼んどいてよかった、救世主たちよ！

全員をリビングに通したところで、芽生も2階から降りてくる。

ニヤッとおれを見て一言。

「よっ、この男殺し」

嬉しくねえ……！

「一つ不思議なのがさ……おれがもらったプレゼントって、あんまり乙女ゲーっぽくないよな？」

「そんなことないわよ。確かに若干（じゃっかん）暴走気味ではあるけど、女の子の喜ぶプレゼンばっかりじゃない」

どこが？　と眉をひそめたら、姉貴はビシリと言い切った。

「プレゼントって、何をくれるかもそうだけど、それ以上に込められた気持ちが大事でしょ。

人それぞれ好みのタイプは違っても、理想の彼氏の究極は、いつも自分の事を考えて、よく見て、愛してくれる人。――大事に想ってくれていることが伝わるプレゼントが一番嬉しいのよ」

うーむ、鬼畜キャラとは思えない台詞だな。けど、たしかにそーゆーもんかも……。

一日バタバタと振り回されて、焦ったりげんなりしたりもしたけど、それでもやっぱり、みんながせいいっぱい祝ってくれてるのはわかって、幸せな気持ちになったから。

「センパイ、何してるの？　準備万端だよ～」

「ああ、今いく！」

扉を開けた途端。

パンパンパンパーン！

華やかに鳴り響くクラッカーと、みんなの笑顔。

「――ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！」

（後書き）

原稿を読んでくれた友人から、冒頭の煌の「それはまだ夜のお楽しみ」の台詞であらぬ想像をしてしまった、とのコメをもらいました。全年齢対象ですから！　残念！（笑）

毎度バカバカしいお話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8332v/

『ときメロ』番外編?　～和希バースデーを迎えるの巻

2011年8月20日13時17分発行